

「わたしの教育記録」特選作品発表!

全入選作品選評

今年度の「わたしの教育記録」特選作品を発表します。
その前に4人の審査員の方々から、入選作品についての選評を伺いました。

特選、特別賞は、共に書くことと 深く考えることを結びつける実践

今年も全国でさまざまなアイデアに基づく確かな実践の取り組みが行われていることを感じさせていただいた。特選の埼玉県日高市立高萩小学校の岡田淳史先生の取り組み「授業を作文で再生する」授業中の子どもたちの思考過程の変化の様子が見えた――は、授業における自分の学びの軌跡を振り返り、家庭と学校の学びのサイクルに取り組み実践としても興味深い。

見通しを持ち、夢中になって学び、その自分の学びを具体的に振り返り、自分の考えや事実と結びつけることで次への意欲を生むことが、深い学びをもたらす。そのために「自分の言葉でまとめている、作文の中で授業が完結、文脈がつながっている(接続詞)、仲間の考えと関連付けて書いている、つぶやきや発言、自分の考えの書き加え、補足資料と

して図や表が入っている」といった段階的に指導に取り組んだ点がどの学校でも取り組み、ノートづくりとも直結していく。

また特別賞の神奈川県川崎市立富士見台小学校の土居正博先生の「力のつく日記指導のあり方に関する考察―進級制度を通して―」は、教職4年目の若手の先生の取り組みで、1年生に対して、級を設定することで子どもに目指すべき目標を明確にして日記を書く力をつけた実践であり、具体的に子どもたちの日記記述のあり方が記載されていることで、その変化が実践から見えてくる記録であった。

今回の特選、特別賞は、共に書くことと深く考えることを結びつけることが、対象を丁寧にみたり授業中に一生懸命に聴く態度をも培うことにつながることを示し、特定の単元や一度の面白い授業ではなく、子どもたちに

根付くコンピテンシーを育む実践ということができるだろう。

またそれぞれが独自性を持った取り組みであるがその一方で、他の教師に活用できるような実践が入選となっているといえる。今年の応募記録の全体的な特徴としては、実践記録の記述がやや薄く、生徒の学びをみるのに読み応えのある記録が少なかったことである。教師が取り組んだ実践と同時に、それを子どもたちがどのように学び、そこで教師は何を悩み揺らいだり、みとったのか、そして次のような工夫が実践としてなされたのかの記述が少ないことによる。今子どもが主体的能動的に関わり深い学びをもたらしていくことに全国的に取り組まれ、その中で子どもものの学びが深まる変化が見える記録を来年度にはさらに期待したい。



東京大学大学院
教育学研究科教授
秋田喜代美さん

入念で着実な実践記録の数々は 教師間の学び合いに役立つであろう

今回は、若手からベテランまで多様な世代の教師の方々の優れた実践に触れることができ、心強い思いを持った。日本の教育界が大きな世代交代の時期を迎えているだけに、安心感を持って今後の日本の学校教育の展開を見ていけそうである。

特選の岡田淳史さんは経験15年の中堅教師、「再生作文で子どもの思考過程の変化を見る」取り組みは、授業の成果を子どもの思考の変化として具体的に捉え、以降の教材研究と授業展開に生かしていることとする「形成的評価」の優れた実践である。

特別賞の土居正博さんは経験4年の若手教

師、「力のつく日記指導」を進級システムまで創って進めており、明確なねらいを持った取材力を土台に自分の経験や着眼を詳しく日記に書き記していく表現力を育てる、という点で素晴らしい成果を上げている。

入選された山下喜子さんの「忠海ジュニアガイドになろう」という総合的な学習の時間の実践、三浦清和さんの「グループワークで主体的な活動を引き出す」という取り組みは、いずれも次期学習指導要領で強調されているアクティブ・ラーニングの眼目となる主体的・能動的な学習のあり方を追究したものである。ただし、こうした活動展開をそのままなぞれ



兵庫教育大学前学長
梶田 叡一さん

ばアクティブ・ラーニングになるという早呑み込みは禁物である。文部科学省が繰り返し言うように、授業や学習展開の「型」としてアクティブ・ラーニングを捉えてはならないからであり、「主体的で」「対話的な」「深い学び」を、習得・活用・探究の各場面工夫して実現すべきだからである。三井一希さんの報告、田中直毅さんの報告も興味深いものであった。選外とはなったが、私には、小野威人さんの「事実の『探求』から知の『探究』へ——生徒の学びの質を向上させるための『仕掛け』を考える」も印象に残るものであった。

「深い学び」に寄せる関心の強さ

総合的な学習の時間は、静かに定着しつつある。教科を超えた言語活動も広がってきた。さらに、アクティブ・ラーニング（AL）についても、単に技法としてではなく、深い学びとの兼ね合いで模索する兆しが見て取れる。今年はその感を強くした。もっと広がってほしい。

岡田淳史氏の「授業を作文で再生する」授

業中の子どもたちの思考過程の変化の様子が見えた！」（特選）は、算数の授業を「再生作文」で振り返る、というユニークな手法を編み出したことに特色がある。板書を手がかりに、学習過程を作文に再現する。次いで自分と友達の考えを関連付けて書く。この間の子どもたちの思考の変化をつかみ、教材研究にまでつなげている。



政策研究大学院大学
客員教授
永井 順國さん

土居正博氏の「力のつく日記指導のあり方に関する考察——進級制度を通して——」（特別賞）は、小1を対象に「書かされる日記」からの脱却を目指した言語活動である。「題名をつける」ことで焦点化を促し、自分だけの気付きを記述することで、伝える・伝わるものになっていく。文章力講座入門編と言えよう。

山下喜子氏による「忠海ジュニアガイドに

なろう」(入選)は、総合的な学習の時間にA1の要素があることに改めて気付かせてくれる。地域の人々の協力を得て、古い街並みとたばこ店や時計店、神社など地域を自らの足で調べる。台本を作って大人向けのガイド役もこなす。地域に学び・課題を見つけ・愛着を深めていく様子が伝わってくる。

三浦清和氏の「グループワークで主体的な活動を引き出す『アクティブラーニング』」(入選)は、黒板とチョーク頼みの中学校社会科の授業改善に挑戦した実践だ。例えば自由民権

運動は、明治時代の政治風刺画を素材に、グループ間の協働で読み解く。産業革命の概念は、はさみ(手工業)と画用紙(資源)とパンチ(機械)を配布し、ワークシヨップの手法でイメージをつかませる。論述問題の白紙解答の急減につながったというのも理解できる。

「プで考える」「振り返る」などの段取りが一目でわかる。両親またはどちらかの親が外国籍の子どもの多いという実態から考えついた。文中の「つまずきのある子にとって『ない』と困る支援」は、他の子にとっても『ある』と便利な支援」という記述が印象に残った。

田中直毅氏の「発表したい!伝えたい!残したい!」と考えて、伝えて、ふり返る ICT活用」(新採・新人賞)は、タブレットを子どもの意欲を引き出すツールとして使いこなす。若者らしいセンスの良さが光る。

実践記録から伝わる 教育活動の熱い気持ちに魅力

実践記録の魅力は、授業や日常の教育活動の具体的な営みです。伝えたいことはたくさんあるので、抽象的な報告や学校研究の総論のようになります。熱い気持ちで冷めないように綴ることも大事だと思っています。

特選の岡田淳史先生「授業を作文で再生する」授業中の子どもの思考過程の変化の様子が見えた!」は、授業中の思考の変化を知りたいという課題から生まれた実践です。授業の展開を正確に書く(事実作文)を自分の考えと友達を考えを関連付ける(思考作文)にレベルアップする道筋は手堅く、評価にも工夫が見られ具体的な事例を取り入れまとも

のつく日記指導のあり方に関する考察―進級制度を通して―は、1年生における書かせるだけの日記から書く力を育てる日記指導の実践です。進級制度の3級から1級という設定は指導目標が明確になり、書く力を獲得していく過程を理解しながら意欲的に書くことに向かう子どもの姿がよくわかりました。入選の山下喜子先生は、ジュニアガイドになろうという目標で、地元の人々との交流や街並み調査を通して、学びを深める子どもの活動が生きていくと伝わってくる記録でした。三浦清和先生は、意見を書くことや論述が苦手という生徒に生きて働く学力を育てるための授業の工夫をされました。事例として、風刺画

を読み取る授業(自由民権運動)や近代世界のワークシヨップ(欧米の進出と日本の開国)を通して、文章を書く力を伸ばすとともに積極的に授業に参加する生徒の様子が伝わり魅力がありました。三井一希先生は、在外教育施設である日本人学校の課題解決の手法として学習アイコンの開発をされた記録です。子どもと保護者の評価では見通しがもてるようになった、授業の流れがわかるという感想があり、成果がよくわかる記録でした。新採・新人賞の田中直毅先生は、算数科の授業でICT活用により自分の考えの過程が説明できるようにになった指導について、丁寧な記録から熱意が伝わってきました。



元・京都女子大学教授
吉永 幸司 さん